映画『血と骨』における「怪物的」な男とその女

金　祉硯

1．はじめに

映画『血と骨』[1]は、「在日」の第2世世代で「在日」文学者である梁石日[2]の小説『血と骨』(1998年)を原作に、崔洋一監督[3]によって2004年に映像化された。[4]

崔監督は、梁石日の小説『血と骨』の映画の実現化において、「主人公の金俊平が送った人生は、紛れもない日本の「在日朝鮮人」一世の生きざまの一つであり、金俊平のキャラクターも「在日朝鮮人」一世にありがちなものでもあるが、日本における「在日朝鮮人」の歴史的・社会的・政治的問題はなるべく映画の背後に退けて、前面にはその一般性を強く出したかった」[5]ため、実際映画『血と骨』は一般性のある「個」としての金俊平の一生を描き、崔監督の狙い通りの評価を獲得した。[6]

しかし本稿の基本的な立場は、映画『血と骨』は在日朝鮮人男性のステレオタイプ[7]の無意識・無批判的に再生産したのではなく、むしろ「怪物」的な在日朝鮮人男性ステレオタイプに極めて近似した存在として、意識的に書き出した作品である。なぜなら、映画版において金俊平とその周囲の人間関係でみられる、金俊平の「怪物的」暴力は、日本帝国による植民地支配下によって生じ、それに対する反作用・反動として膨張した「怪物」的暴力性であることが、映画版の細部に刻印されているからだ。

本稿では、金俊平と彼を取り巻く人間との関係、特に3人の女性との関係を中心に、その女性たちにむける俊平の「怪物」的な暴力と支配欲が、日本帝国の植民地支配による産物であることを考察する。そのことによって、崔監督が金俊平の表象に在日朝鮮人の歴史的・政治的・社会的分脈を組み込んでいることを立証することができる。

2. 被植民者による家父長主義的暴力と植民地出身女性――李英姫（イヨンヒ）

映画版では、金俊平と同じく朝鮮半島の済州島出身の英姫、日本人で戦争未亡人の清子、日本人で子持ちの鳥谷定子の3人の女性が登場し、金俊平と3人の女性との関係において、植民地支配・ジェンダー支配・エスニシティーにおけるヒエラル

キーが複雑に交差するところを描いてみせた。本節では、これらの問題をふまえて金俊平という人物が、映画版においてどのように「怪物」的在日朝鮮人・男性として再構築されたのかを、金俊平と3人の女性たちとの関係性を通して考察する。

まず一人目に、映画版において金俊平と同じ朝鮮半島の済州島出身で、俊平の妻で子供たちの母親の李英姫と俊平の関係を考察する。

小説版の英姫は、性的自律性を備えた女性であるが、映画版の英姫は、俊平の性暴力に抵抗することもできない弱い女性として描かれている。これに当たる場面は以下の通りである。

表1) 映画と小説における金俊平と英姫の肉体関係

映画『血と骨』

図 1　英姫を暴行する金俊平

図2　金俊平の暴行に抵抗する李英姫

俊平が悪びれることなく座敷に座りこんで、マッコリ(どぶろく)をあおっている。(中略)

英姫「アイゴ、イノム(この野郎)！」と、俊平に殴りかかる。

俊平、ひょいと避けて、英姫にのしかかっていく。英姫の体をまさぐる俊平。(中略)

四つん這いになって逃げ出そうとする英姫を、俊平、後ろから抱きすくめる。

英姫、俊平を払い除けようとするが、しっかりと虫のようにへばりついている俊平。(中略)強引に唇を重ね、無理矢理舌をねじこむ。英姫、声をたてることができない。(中略)英姫、両脚を強く閉ざして押しとどめようと抵抗するが、下履きをはぎ取られ、英姫の中に俊平が押し入ってくる。(pp.102～105)[8]

小説『血と骨』	酒を飲み終えた金俊平は英姫の体を求めた。このいまわしい性の快楽！英姫の体に押し入ってくる金俊平の力の前に英姫は何もかも忘れてしまう。それはひとときの夢・幻のようであった。(上、p.153)[9]

金俊平との肉体関係において、小説版では性の快楽を自覚している英姫だが、映画版では俊平の性暴力の一方的な被害者である。崔監督は、映画版において英姫の性的自立性を排除することで、金俊平によって身体的・性的支配を受ける英姫へと再構築した。さらに金俊平による、快楽を一切伴わない身体的・性的・精神的暴力の、一方的「犠牲者」として英姫を描いた。

加えて英姫の経済的自立の側面について言えば、小説版では俊平との出会い以前から店を一人で切り盛りしながら一人娘を育てる経済的自立性[10]を持つ女性として描かれている。

それに対して映画版において英姫は、俊平と結婚する前の英姫の経済活動は映画の冒頭においてナレーションで説明されるだけで、結婚後の英姫の経済活動に関する描写も少ない。だが俊平が清子と別家で暮らすようになることをきっかけに、英姫は自宅の1階を食堂にして経済活動をすることで俊平の経済的支配から逃れる女性として描かれている。映画版における英姫の経済活動の場面に該当するのは以下の表の通りである。

表2)映画版における英姫の経済活動

映画『血と骨』	①俊平と結婚前の英姫の経済活動
	正雄の声「これが、僕のお母んです……お母んは十六の歳に、いっぺん嫁いだんですが、(中略)我慢でけず済州島を飛び出して……それから、岸和田の紡績工場で働き始め……」(中略)「そこで妻子持ちの朝鮮人主任とねんごろになって、妊娠して、紡績工場を追い出されてしもたんです……」(pp.103～104)
	②俊平が清子と別家暮らし始めてからの英姫の経済活動
	大成通り裏・朝鮮人長屋(一九五二年・初夏) 「弁天市場」から見えていた焼け野原も、すっかり復興している。(中略) 英姫(48歳)が「あさひ食堂」と書かれた暖簾を軒先にかけ、水を打つ。

映画『血と骨』	正雄の声「お母さんも父親に張り合うようにして、行商をやめて、食堂を始めたんです……」 家の前で俊平(46歳)が憎々しげに見ている。 英姫、俊平の視線を無視して中に入る。(pp.136～137)

ここでなぜ崔監督は映画版の英姫を金俊平による性的・身体的・精神的・経済的暴力の犠牲者に変えたのか、その上弱い女性に作り上げられた英姫に向ける俊平の「怪物」的暴力の意味を在日朝鮮人がおかれてきた社会的地位の側面から考察する必要がある。

先に結論から述べると、金俊平が英姫に向ける暴力は、日本帝国の植民地支配によって屈折させられ、強化された朝鮮半島の家父長制と「賢母良妻」イデオロギーの所産である。この点において映画版では、俊平の暴力が日本植民地支配における産物であり、しかもその暴力が「怪物」的であることを浮き彫りにするために、英姫はその暴力に抵抗することが出来ない犠牲者として再構築したのである。

朝鮮半島において「家父長制」[11]は、儒教的規範を強く受容し、儒教を背景として性別に基づく強い役割意識が植えつけられていた。[12]しかし朝鮮半島の開国と1905年の第2次日韓条約(乙巳条約)の締結を境に、近代国家建設と国力培養のため、社会の基本である家庭の改革を提唱し、国民教育が強調されたが、特に次世代の教育を担う女子の教育の必要性が高まった。そこで女性教育に用いられたのが「賢母良妻」イデオロギーだが、1910年の日韓合併によって「賢母良妻」イデオロギーが定着するのである。[13]この際の「賢母良妻」イデオロギーは、合併前の儒教に基づいた「賢母良妻」イデオロギー[14]とは異なって、日本帝国の植民地支配の一環として移入された日本の女子教育制[15]の一環をなすものであり、日本帝国の「良妻賢母」イデオロギー[16]が内実をともないつつ朝鮮に導入されたのである。[17]

日本帝国の植民地女性教育の導入によって朝鮮半島の男性は、従来の男女の位置関係の崩壊の危機感を覚えた。日本帝国によって「外」の活動の領域から追い出された朝鮮半島の男性たちには、支配できる場として家庭という「内」しかなかった。しかし日本帝国による女子中等教育政策は、朝鮮半島の男性にとっての唯一の支配の場であるはずの「内」までもが奪われてしまう恐れを感じさせたのだ。朝鮮半島出身の男性は家庭内での優位性を守るために、日本帝国による政治的・経済的差別から家族を守るために再び家父長制を強化した。[18]さらに日本帝国崩壊以降の在日朝鮮人社会では、在日本大韓民国民団(以下、民団と略す)と在日本朝鮮人総連合会(以下、総連と略す)の各団体がそれぞれ行った女性教育によって在日朝鮮人女性は

「賢母良妻」イデオロギーに縛られた。民団は婦人会という女性組織で「家庭・文化・経済に分けられ、近代家族を営む良妻賢母、良妻賢母に必要な文化的素養、合理的な家庭経営」[19]を謳った。総連の女性同盟は「同胞女性の親睦と団結を図る」団体として「民族的アイデンティティをもち安心して子どもを産み育て、祖国の統一と民族の繁栄に向けて女性のすべき課題を果たしていく」ことを目標にしていた。[20]組織の歴史と活動内容は異なっていても、国家に奉仕させるために「賢母良妻」という理念が使われていた。日本帝国植民地主義とその遺制は在日朝鮮人男性に在日朝鮮人女性への支配欲を助長したのである。

しかし社会学者の崔在錫によれば、済州島の男女関係は朝鮮半島本土の儒教的文化に見られる長男優遇思想は希薄で、労働、婚姻、相続、親族組織など見ても、母系の紐帯は強く、本土ほどには済州島の女性の地位は低くなかったという。[21]済州島出身の在日朝鮮人女性たちは日本という新たな生活の場で、日本帝国による「女性教育」と皇民化による在日朝鮮人のアイデンティティの危機から、在日朝鮮人男性による朝鮮半島の前近代家父長制と「賢母良妻」イデオロギーに従属させられたのだ。済州島出身の英姫は、日本帝国による朝鮮半島の植民地支配政策によって屈折させられ、在日朝鮮人もみずから強化した家父長制と「賢母良妻」イデオロギーによって、家父長制イデオロギーへの従属が強められたのである。

岩崎稔らは、以上のような状況を踏まえ、在日朝鮮人社会におけるジェンダー秩序について、以下のように述べている。

> 分断した国家であれ、国民国家を待望した在日朝鮮人は本国の国民統合を強く望んだ。その国民統合のイデオロギー、慣れ親しんだ前近代儒教道徳をベースにして受容し、さらに在日朝鮮人の生活空間は日本帝国の社会的・経済的条件のもとにあったので、在日朝鮮人にとって日本という生活空間は排外的で差別的だった。その理由から家族・宗族・コミュニケーションを守るためにも家父長制を強化せざるをえなかった。[22]

先述した通り日韓合併後、日本帝国による植民地支配の政策の「女子教育」によって、朝鮮半島の家父長制と「良妻賢母」イデオロギーが変容した。そのうえ日本で暮らす在日朝鮮人男性は、日本で受けた差別・抑圧への反作用から生じた民族的意識の高揚により、自分たちのアイデンティティの維持と日本帝国への反発から、その家父長制と「賢母良妻」イデオロギーを一段と強化させたのである。[23]

在日朝鮮人男性は日本社会において民族を理由とする差別や排除に対する代償として家族を支配するなど、男性中心主義が強化された。[24]在日朝鮮人男性が女性に

向ける支配欲は、日本の新・旧植民地主義と在日朝鮮人の支配・被支配関係による産物である。映画版ではこの歴史的・社会的・政治的支配と被支配の問題を浮き彫りにするために、内なる「家」という領域で夫である在日朝鮮人男性の家父長的暴力によって性的・身体的・精神的・経済的支配をうける犠牲者として、英姫は構築された。

3. 日本帝国主義に対する勝利の「戦利品」としての女——山梨清子

二人目は戦争で夫を亡くした日本人女性の山梨清子で、俊平との関係において、小説版とは違う映画版の清子の人物設定と、映画版の清子に対する金俊平の感情に注目する。これらの差異の分析を通して、映画版の金俊平が清子に対してみせる支配欲の意味を検証する。加えて清子に対する俊平の支配欲を引き立てるために、清子をどんな女性に構築したのか明らかにする。

その前に、映画版において金俊平が清子にみせる支配欲の意味をより鮮明に論じるため、小説版・映画版において清子が金俊平に「体」を売ることへの意味を先に検討する。

小説版・映画版において、金俊平と出会う前の清子は、日本植民地支配と日本帝国主義により民族的・階級的に清子は支配者側で差別を行う側、金俊平は被支配者側で差別を受ける側であった。その力関係が、清子自ら自分の「体」を金俊平に売ることによって覆ることになる。日本帝国主義によって差別・抑圧される、日本に住む朝鮮人の金俊平が資本の力によって日本人女性を支配することは、男性による女性の支配の意味とともに、日本人・在日朝鮮人の力関係、支配者・被支配者の関係を逆転することを意味する。しかも俊平による清子の所有は、日本人男性の日本人女性への所有権・財産権の侵害であり、その侵害は資本主義の力に基づいている。日本人の男にとってみれば、自国の女の性が、自分たちが支配し、差別・抑圧している相手の在日朝鮮人により支配されることは屈辱であり、日本の家父長制の侵害でもある。

その一方、在日朝鮮人男性が日本女性を性的に支配することは、朝鮮半島出身男性をから「外」の活動の場を剥奪し、その「男らしさ」を強奪してきた、植民地支配において朝鮮半島出身者を劣位においてきた日本の帝国主義に対する復讐である。従って小説版・映画版において、金俊平にとって清子は、日本帝国主義からの勝利の「戦利品」であった。[25]

次に、小説版と映画版において清子の人物像の差異と、小説版・映画版の清子に対する金俊平の態度の差異を考察する。映画『血と骨』の崔洋一監督は、日本帝国

主義において支配・抑圧・差別を強いられた在日朝鮮人である金俊平の日本帝国主義へのまなざしを垣間見せるために、映画版に三か所、小説版とは異なる設定を導入している。

一つ目は、小説版においては、夫の戦死後、清子がセックス・ワーカーに「没落」した戦争未亡人であるとされているが、映画版ではその説明が排除されている。小説版では俊平と出会う前の清子の素性を説明するが、その場面は以下のようになっている。

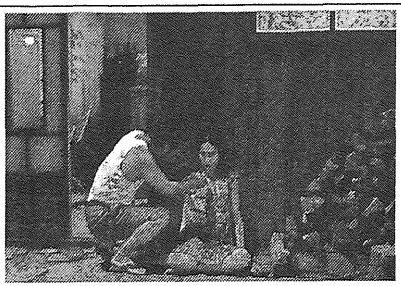
> 寺田町で洋服の仕立て屋をしていた清子の夫は昭和十七年に召集され、翌年フィリピンで戦死した。わずか三年の夫婦だった。幸い家は焼けず残ったが、生活のめどがたたなかった。（中略）何をしても女一人で生きていくのはきわめて厳しい時代であった。あとはおきまりのケースである。歳をいつわってミナミのキャバレーに勤めた。（中略）巷に飢えた人間が溢れているご時世に、三十五歳の寡婦に残された選択肢は限られていた。年寄りの後妻か、妾の口があればむしろ幸いかもしれなかった。（下、pp.230～232）

映画版において清子を、金俊平が日本帝国主義に対抗して獲得した「戦利品」とするためには、清子はセックス・ワークの経験という「キズ」のないきれいなトロフィーに再構築されねばならなかった。清子を「キズ」のない「戦利品」とする場合に用いられた価値基準は、女性の「性」の純潔さを最重要視する、家父長制的価値観である。映画版からは、戦後セックス・ワーカーとならざるを得なかった清子の性の「負」のイメージ、つまり純潔ではない「オンナ」という烙印が払拭されている。

その上、金俊平が、セックス・ワーカーであることで日本社会から疎外された清子を受け入れるのではなく、日本社会のなかで守られている女性を「もの」にすることで、その「戦利品」としての価値をあげたのである。清子を日本社会のなかでも敬意を払われるべき女性として再構築することによって、金俊平が清子を資本主義の力に基づいて屈服させたうえに、日本人男性の日本人女性への所有権・財産権の侵害することができたのだ。

二つ目に、映画版において金俊平が識字能力のないことへの劣等感を清子にぶつける部分が欠けているところである。これに対応する場面が以下の通りである。

表3)小説版・映画版において文字の読める清子に対する金俊平の感情

映画『血と骨』	 図3　清子に腐肉を強要する俊平 図4 腐肉を強引に清子の口に入れる俊平 俊平「……おまえ、なんで子どもでけん（中略）二年もおって、なんででけんのや」 清子、押し黙って答えない。俊平、黙ったまま清子の襟首を掴み、そのまま階段を駆け降りる。（中略）俊平が豚の腐肉が入った一斗缶から、腐肉を一切れ取り出し、へたりこんでいる清子の口元に突きつける。腐肉に顔をそむける清子。 俊平「食え、食って精つけて、わしの子ども産め」（中略） 俊平、腐肉を一切れ拾い咀嚼して、清子の口を強引に開け、口移しでねじこむ。 吐きそうになる清子の顎を押さえ、無理矢理上下させて、咀嚼させようとする。（中略） 清子、口元から涎を流し、涙とも悲鳴ともつかない嗚咽をもらす。(p.138)
小説『血と骨』	帰宅してみると、清子は二階の部屋でお茶を飲みながら本を読んでいた。読み書きのできない金俊平は、それが自分に対する嫌味に映り、お茶と茶菓子を載せている座卓を蹴飛ばした。 「本なんか読みやがって。本読む暇があったら子供を産め！おまえは子供の産めん体か！」 面と向かって露骨に女が劣等感をいだいている秘密を糾弾されて清子は返す言葉を失った。(中略)その夜を契機に酒に酔った金俊平の暴力がはじまった。 （下、pp.269～270）

小説版では、文字が読める清子に対して劣等感を感じる金俊平は清子が子供を産めないことを理由に暴力をふるう。日本帝国が植民地支配の一環として実施した土地調査事業と産米増殖運動の結果、多くの朝鮮人は貧困に苦しみ、流放するようになり、朝鮮の子どもたちは学習の機会を奪われた。

このような背景を踏まえ、朝鮮半島で暮らしているときから生活の貧しさから全く学校に行けなかった在日朝鮮人は、母国語はもちろん日本語の読み書きもできない人々が大多数であった。[27]そのうえ在日朝鮮人にとって日本語の「識字能力」は、日本で生き残るために必要な機能的能力であったが、貧困と民族差別によって教育の機会さえなかった。小説版において文字の読める清子に劣等感を感じる俊平の姿は、日本帝国による植民地支配の「負」の産物であり、日本帝国に対する憎悪が露にするところである。

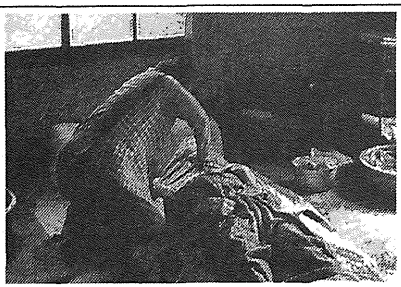
そして小説版の金俊平にとって清子の識字能力は、「女性らしさ」を損なう能力でしかない。その背後には、女性を子、特に息子を生産するための、手段としてしか見なさない家父長主義が存在している。さらに彼女を生物学的な「メス」の位置に貶めることによって、日本帝国主義によって男としての行き場を余儀なく失った被植民地出身男性の劣等感を解消しようとしているとも言えるだろう。

それに対して映画版では文字の読めないことへの劣等感を感じる俊平の姿は排除、彼が清子に向ける暴力は彼女の性的再生産能力の欠落に対する言葉の暴力であった。映画全体を通しても、金俊平の文字が読めないことを垣間見せる部分はあるが、そのことについて劣等感を感じる金の姿は描かれていない。これは日本の新・旧植民地主義によって母国語はもちろん、日本語の読み書きが出来ない在日朝鮮人の姿こそが日本帝国による「負」の産物であることへの説明から回避したことは否定できない。さらに在日朝鮮人男性は識字能力の無さに対して恥じることのない、無知であるというステレオタイプを築いたという側面もあるが、それとは対比的に、女性に対して性的欲望と再生産機能を重視する「怪物」的な在日朝鮮人の姿を浮き彫りにすることが出来た。そのうえ、清子と俊平の関係を、「個」の物語として二人を恋愛関係に仕立て上げることによって、従来の日本帝国と旧・植民地という支配と被支配の関係を克服しようとしたのである。

三つ目に、金俊平が脳腫瘍で寝たきりになった清子を殺す方法の差である。

俊平が清子を殺す設定の差異は、小説版と映画版における寝たきりになった清子に対する俊平の感情の差から生じている。小説で金俊平は仕方なく清子の面倒をみているが、いつまで続くのか不安を感じる。だが映画では、清子に愛着より執着すら感じさせるように彼女の面倒をみる金俊平を描いた。この場面は以下の通りである。

表4）小説版と映画版における寝たきりになった清子を殺す金俊平の設定の差

映画『血と骨』	 図5　病人の清子を殺す金俊平 図6　清子の最後を見届ける金俊平 洗面器で新聞紙を濡らしている俊平。(中略) 俊平が清子の顔に濡れた新聞紙を載せて押さえつけている。(中略) 俊平「……楽にしたった……」(中略) 濡れた新聞紙が次第に赤く染まる。無表情に、清子をじっと見ている俊平。 (pp.162～163)
小説『血と骨』	「こいつは、はよ楽になったほうがええ」(中略) 不意に金俊平は新聞紙を清子の顔にかぶせ、体重をかけてどすんと座った。ペシャ！と何かが潰れる音がして、「うおー」という断末魔の叫びがあがった。(中略)新聞紙に血がにじんできた。(中略)清子は死んでいなかった。目をむき、口を大きく開けて呼吸していた。ヒー、ヒーと喉の奥が破れて、そこから空気は漏れているようだった。(中略)だが、反応はなかった。ペシャ！と何かが潰れる音がしたが、脳が潰れた音だろうか。頭蓋の縫い目からも血がにじんでいる。(中略)「おばさんが死んでる」と告げた。酒を飲んでいる金俊平は微動だにしなかった。(下、pp. 357～359)

小説版と映画版の両方における清子の介護は、家庭の「内」という閉ざされた空間で、在日朝鮮人が旧来の支配者である日本人に介護というかたちで奉仕させられることになり、日本帝国による支配・抑圧が繰り返されるのである。

それとは対比的に、俊平にとって清子の介護は男による女へ、在日朝鮮人から日本人へ、所有主から所有物への暴力的な支配が隠されている。俊平にとって清子は資本主義の力で手に入れた「もの」であり、かつ日本帝国主義からの「戦利品」である。だからこそ、その「戦利品」への所有権・財産権を行使し、俊平は清子の面倒をみるのである。その暴力的支配が浮き彫りになるのが清子を殺す俊平の姿であ

る。小説では清子の顔に濡れた新聞紙をかぶせて体重をかけて顔に座る残酷な殺し方をし、最後も見届けず酒を飲む。清子を殺した後、清子を殺したのではなく苦しみから救ったと思い込む俊平だが、映画版では、清子の顔に濡れた新聞紙をかぶせて窒息死させ、彼女の最後を見届ける俊平が描かれている。小説版・映画版とともに清子の死は俊平の「もの」であるため、その始末も「もの」の主である俊平の権力に委ねられた。その一方映画版における清子の最期は、俊平が介護という呪縛から逃れるためではなく、清子のことを考えての行動、すなわち「愛」ゆえの行為であるという描き方をしている。「愛」が介在しなければ、俊平による清子の介護は、朝鮮半島が日本の植民地支配に置かれた際の支配者側を、しかも女性を、被支配者が介護することであり、これは、日本植民地主義・日本帝国主義の支配の繰り返しである。通念的には女性の仕事として女性ジェンダー化されている介護を俊平が行うことには、ジェンダー序列をかき乱す危機も潜んでいる。このジェンダー支配・新・旧植民地主義支配におけるヒエラルキーの問題を取り除くため、崔洋一監督は、俊平と清子の関係を恋愛の物語に仕立てたのだ。言い換えれば新・旧植民地主義・民族・階級・ジェンダーが交差する支配・被支配の関係を、金俊平と清子の恋愛劇に仕立てることで乗り越えようとした。

これは、男による女への暴力的な支配を背後に隠しながら、金俊平と清子の関係を恋愛の物語に仕立て、日本植民地主義・日本帝国主義の対立と矛盾を女性の媒介を通して乗り越えようとしたものである。言い換えれば、清子に対する金俊平の感情が愛であるように描くことによって、金俊平と清子のジェンダー支配と新・旧植民地主義におけるヒエラルキーの亀裂・矛盾の解消を試みたのである。

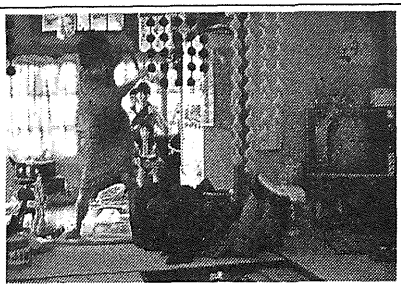
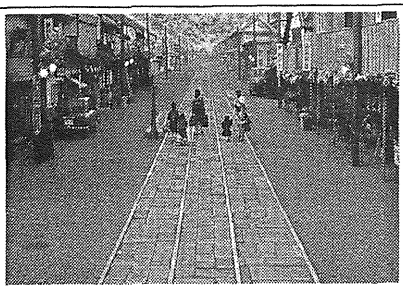
4. 日本帝国による在日朝鮮人への暴力を再現する女——鳥谷定子

三人目は、社会階層の低い女性でバラック小屋に精神薄弱の娘と一緒に住んでいた鳥谷定子だが、脳腫瘍で寝たきりになった清子の介護を名目に俊平の家に迎え入れられる。小説版と映画版における定子の設定の差、つまり定子の家出の設定の差異を考察することで、映画版において定子が金俊平にふるう暴力の意味を検討する。

小説版と映画版における定子の外見は美に恵まれていないが、小説版で「美形である必要はなかった。金俊平にとって必要なものは女の肉体であった。(中略)確かな手応えのある肉体こそ金俊平の望むところだった」[26]と俊平が定子を受け入れた理由を述べ、ここから読みとれるとおり、定子は家事手伝いという労働の役割とともに、俊平の性欲を解消してくれる「女」という性の「生殖器官」として迎え入れられたのである。

小説版と映画版において定子は、金俊平の息子を産んで俊平の家族になり、財産を自分の息子のものにしようするが、金俊平の抑圧・支配は変わらない。ところが金俊平が倒れて下半身麻痺になってから、最終的に定子は金俊平に暴力をふるって家出をするが、この場面において小説版と映画版に差があり、それに対応する場面は以下の通りである。

表5) 映画版と小説版において定子の家出の設定の差

映画『血と骨』	 図7　俊平に暴力をふる定子  図8　子供達を連れて金の家を出る定子 俊平「金、どこや」(中略) 俊平、定子の足首を杖で叩く。(中略)定子、俊平の杖を取り上げる。 俊平、土間に倒れ込みながらも定子の足首を掴む。定子、片足の脚で俊平を蹴るが、容易なことでは振り払えない。 俊平「殺したる！」 定子、杖で俊平の腕を叩く。(中略) 定子の足を掴んだ手を離そうとしない俊平。 定子、頭、肩、腰、脚とかまわず俊平に杖を振り降ろす。(中略) 俊平の額から血が流れる。(中略) さすがの俊平も痛みに耐えかねて、呻き声をあげる。(中略) 定子、髪を振り乱し、肩で息をしながら憎悪な目で俊平を見下ろす。 定子「死にぞこないが。うちを舐めたらあかんで」(中略) 定子「あぁ、せいせいした……」 俊平「……」 大成通り(別日・早朝) 定子が龍一を背負い、所帯道具を持った、ゆき子、妙子、祐子、貞子を引き連れ、晴々した顔で渡っていく。(pp. 179～180)

小説『血と骨』	定子は手で鼻と口をふさぎ、金俊平をまたいで二階へ上がろうとした。その定子の足を金俊平が掴んだ。(中略) 「殺してやる！この淫乱！わしの金で好き放題しやがって。わしをここまでコケにしやがって。きさまは何回殺してもあきたらん奴や」(中略) 母親に指示された妙子は金俊平を避けて居間に行くと、桜の棍棒を取って母親に手渡した。この桜の棍棒は昔から金俊平が片ときも離さずに持っている護身用の武器である。その桜の棍棒を持った定子は足を掴んでいる金俊平の腕を叩いた。だが、金俊平は定子の足を離そうとしなかった。定子は何度も何度も金俊平の腕を殴打した。(中略)定子は、激情にかられて金俊平を殴打し続けた。(中略) 「死にぞこないが。うちを舐めたらあかんで！」(下、pp. 417～420)

小説版・映画版において定子は、家庭という「内」の領域で、朝鮮半島の家父長制に基づき俊平によって性的・身体的・精神的・経済的に支配された。だが、俊平が健康を失ったことをきっかけに、俊平が定子に向けた「暴力」を、定子が俊平に繰り返すことによって俊平の支配から抜け出そうとした。

俊平は身体的損傷によって男の「性」がその機能を果たさなくなり、「外」の領域で「男」として戦うことが出来なった。「内」・「外」の領域において「男」としての行き場を失ってしまった俊平を、定子が十分な「男」ではなくなったことで、ジェンダー支配が覆るのである。重ねて定子に向ける俊平の資本主義イデオロギーによる支配において、その資本主義の根底である俊平のお金を定子が奪い取ることで、俊平の支配を解除することができた。それだけではなく定子は俊平の「暴力」を、倍加して俊平に対してふるうことにより、俊平による朝鮮半島の家父長制と「賢母良妻」イデオロギーの暴力から脱出したのである。

定子は、金俊平に朝鮮半島の家父長制、資本主義、ジェンダー序列による支配をうけたが、金俊平の力の原理である暴力を逆に利用し、俊平に復讐するのである。ジェンダー関係において定子は金俊平より弱者であるが、植民地主義状況においては日本国籍の定子が強者であるため、定子の暴力は、女による男への逆襲・復讐であるだけではなく、植民地主義的関係における日本から在日朝鮮人への暴力の再現でもあるのだ。

定子の暴力は最終的に日本帝国の「良妻賢母」イデオロギーによるもので、これについては小説版と映画版における定子の家出の設定の差異から明らかになる。

小説版では、元夫との間で生まれた精神薄弱の娘だけを連れて家出をする。残された子供達4人は俊平との間に生まれた子供で、その中の一人は自分の意思により

母親の元に行き、残りの3人の子供を全員連れて俊平は北朝鮮に「帰国」[28]することになる。小説版の定子は、妻と母親の役割を放棄した女性として描かれているが、映画版では、家出の際に子供達を全員連れて行く母親に変えられ、母親の役割を果たす女性へと組み立てられた。

それに対し映画版は、家出をする際に子供を全員連れて行く母親となり、日本帝国の「良妻賢母」のイデオロギーのうち、「賢母」の役割を果たす「母性」のある「母」として再構築された。定子は「良妻賢母」の「良妻」の役割を在日朝鮮人男性対して果たすことはなく、子供達のために「良妻賢母」の「賢母」の役割に重きを置く日本国籍の女性として造形された。つまり、映画版では、日本国籍の女性が日本帝国の「良妻賢母」の「妻」としての規範を守るべき相手は、在日朝鮮人男性ではないという、定子のナショナリズムがより強く描き出されている。

鳥谷定子は、金俊平に朝鮮半島の家父長制、資本主義、ジェンダー序列による支配をうけたが、金俊平の力の原理である暴力を逆に利用し、俊平に復讐するのである。ジェンダー関係において定子は金俊平より弱者であるが、植民地主義状況においては日本国籍の定子が強者であるため、定子の暴力は、女による男への逆襲・復讐であるだけではなく、植民地主義的関係における日本から在日朝鮮人への暴力の再現でもあるのだ。定子は子供を全員連れて家出をするが、俊平による家父長制的の支配から脱出とともに、「母性」ある「母」を充実に遂行する日本帝国の「良妻賢母」の「賢母」として構築された。

5. おわりに

本稿は、金俊平と3人の女性との関係を小説版と映画版との差異の分析を通して、いかに金俊平という人物が、映画版において「怪物」的在日朝鮮人・男性として再構築されたのかを考察した。

映画版で李英姫は、男の性的・肉体的・精神的・経済的暴力に抵抗することもできないような女性として表象された。そのことによって、朝鮮半島の家父長制と「賢母良妻」イデオロギーに起因する俊平の暴力とその暴力を受ける英姫を対比的にみせることで、俊平をより「怪物」的男性に表象することができた。

清子は、金俊平にとっての日本帝国に対する「戦利品」としての側面が強調されていた。それゆえに、小説版においては存在した清子の「性」の「負」のイメージが映画版からは払拭された。植民地主義・民族・階級・ジェンダー・資本主義の交差による支配・被支配関係の問題を、2人の関係を恋愛物語に仕立てることで乗り越えようとした。さらに、二人を恋愛関係に仕立てることによって、寝たきりにな

ってからの清子に対してみせる俊平の愛着が、金俊平の「怪物的」暴力を一層際立たせた。

定子は、俊平の肉体的・資本主義イデオロギーによる暴力をもって俊平による朝鮮半島の「賢母良妻」の規範の抑圧・支配から脱出する女性だが、映画版において定子は、日本帝国の「良妻賢母」イデオロギーの暴力を俊平にふるう女性として構築されたのである。つまり定子は、日本人女性が「良妻賢母」イデオロギーを遵守すべき相手は日本国籍の日本人であるという民族主義・植民地主義を内面化しており、それを遂行する「日本帝国」の女性として表象された。

崔洋一監督は、小説『血と骨』の映画化において、歴史的・政治的・社会的文脈から「在日」という特定性を正面から向かい合うことは避け、「在日」ものに「普遍性」を獲得させるために、映画版において「在日」の特性を排除しようとした。そこには本作品を一般の日本人観客にも受け入れやすいものにしようとする、商業的成功を目指す意識も働いている。

しかしながら、日本における「在日」の歴史的・政治的・社会的状況を認識している観客からみると、俊平の「怪物性」の背後に働いている要因は明らかである。崔監督は、「在日」の植民地支配の政治的・社会的・歴史的背景が分かる観客だけがわかるように、金俊平が日本帝国による植民地支配によって「怪物」にならざるを得なかった存在として表象したのである。このような仕組みを通して、映画『血と骨』は、「在日」ものでありながら、「普遍性」を得ることができた、商業的「在日」映画といっても過言ではない。

注

1　小説・映画『血と骨』には、1921年、朝鮮済州島生まれの主人公が17才の時、「君が代丸」という船に乗って日本の大阪の猪飼野の朝鮮人集落に住み付いて以来、そこで家庭を作り始め、1982年までの金俊平の壮絶な模様が軸となっている。

2　梁石日(ヤン・ソギル)：1936年8月13日大阪市猪飼野生まれの「在日」の作家で、著書に小説『タクシー狂想曲』『族譜の果て』『子宮の中の子守歌』『夜を賭けて』(2002年金守珍監督により映画化)『血と骨』(2004年崔洋一監督により映画化)『夏の炎』『闇の子供たち』『異邦人の夜』『海に沈む太陽』『カオス』などがある。

3　崔洋一(さい・よういち)：1949年7月6日、長野県佐久市生まれの在日韓国人2世(国籍を朝鮮から韓国に変更)の映画監督である。東京朝鮮中高級学校高級部を卒業後、照明助手として映画界に入り、小道具、製作進行を経て、主としてテレビ映画の助監督となる。大島渚『愛のコリーダ』や村川透『最も危険な遊戯』などのチーフ助監督を務

め、1981年日本テレビ『プロパガンダー』で監督デビューする。1983年、映画デビューとなった『十階のモスキート』で毎日映画コンクール新人賞、ヨコハマ映画祭新人監督賞を受賞した。他の映画作品には『性的犯罪』、『いつか誰かが殺される』、『友よ、静かに瞑れ』、『黒いドレスの女』、『花のあすか組！』、『Aサインデイズ』、『豚の報い』、『犬、走る』、『血と骨』などがある。

4　本稿において在日朝鮮人、「在日」という名称の使い分けは以下の通りである。朝鮮半島が日本の植民地支配された時代に日本へ渡り、解放後にも日本に住み続けた朝鮮人は「在日朝鮮人」と称する。加えて小説『血と骨』においても金俊平は在日朝鮮人であると描写されているので、小説版・映画版『血と骨』の金俊平は「在日朝鮮人」として呼ぶ。それとは別に本人、もしくは先祖が朝鮮半島出身である人たちを、朝鮮・大韓民国という国籍を問わない意味で「在日」という呼称を使うことにする。

5　崔洋一・梁石日「『在日小説』の枠を突き破る強烈な個性が偉大な普遍性を獲得した」『アプロ21』2(8)巻号、1998年、4～5頁

6　映画『血と骨』は、高和政の「欲望のままに暴力をふるい続け、金に対する飽くなき執着心をもつ主人公・金俊平の姿に、＜人間の「業」＞が見事に描き出されている」、「在日朝鮮人の物語であるにとどまらない＜圧倒的な人間像＞を描ききった作品」であるという評、垣井道弘の「『血と骨』は一人の並外れた男と家族の物語で、在日韓国人の歴史ではない。むしろ父と息子の葛藤を描くことで、物語としての普遍性を獲得している」という評、上野昂志の「歴史を描くと形骸をさらすのに、いい加減うんざりしていたところに、まず個としての人間をその肉体において描いた作品が現れた」という内容の評価を得た。

高和政「商品化される暴力－映画『血と骨』批判」『前夜(第一期)』4巻号、2005年、40頁

垣井道弘「崔洋一監督ロングインタビュー　－ 醜悪のゆえに光輝くこともある」『キネマ旬報』2004年11月下旬、33頁

上野昂志「血と骨作品評」『キネマ旬報』2004年11月下旬、42頁（引用順）

7　戦前の朝鮮人の代表的イメージは、社会の底辺を支える貧しい労働者で、誠実に生きる人というものであったが、戦後の朝鮮人は従順でもの静かな植民地人から、大日本帝国の被抑圧者であった悲劇の民族へとイメージが変化した。1960年代から1970年代の映画では、日本の支配に対して抵抗する朝鮮人の姿がようやく描かれるようになったが、一方で、朝鮮人が恐怖の対象であった時代を描く作品も現れ、その多くは戦後の混乱期を舞台としたヤクザ映画が多い。1980年代の終わり頃から1990年代にかけて、在日の映画人が在日を描く作品、在日の作家の小説を原作とする作品なども現れ始め、在日のイメージは大きく変化する。貧困や犯罪、そして植民地時代という暗いイメー

ジが希薄になり、また本名を隠してひっそり生きているというステレオタイプから、可視化された存在になったのである。

門間貴志「朝鮮人と中国人のステレオタイプはいかに形成されたか」『スクリーンのなかの他者』岩波書店、2010年、142～156頁　参考

8　崔洋一・鄭義信・梁石日の『映画「血と骨」の世界』(新幹社、2004年)からの引用で、以下本論での映画『血と骨』からの引用はすべてこの書籍からのものである。

9　梁石日『血と骨』(上)、(下)(幻冬舎文庫、1998年)からの引用で、以下本論での小説『血と骨』からの引用はすべてこの書籍からのものである。

10　小説『血と骨』における英姫の職歴は以下の通りである。

済州島から大阪へ渡る→大阪岸和田紡績工場→酒商売→金俊平と出会う→酒商売を続ける→闇市でものを売る→闇市で大量密売→蒲鉾工場の食事の準備・頼母子講→朝鮮の雑貨屋→酒商売→ヒロポン密造→酒商売

11　韓国の家父長制は、女性に対して「三従」「七去之悪」という伝統的な儒教規範の従属を強く説いてきた。それは父系継承線を維持し、祭祀を守りつづける目的から生まれたものである。朝鮮半島の家父長制は役割の配分においても、「男女有別」という男女の徹底した役割の分担だけではなく、空間的な領域の区分、隔離をも含んだ。朝鮮半島において女性は単に差別の対象であったというよりも、領域的にもはっきりと男性と区分された存在だったのである。そして国家的観点から男女の対等は認めながら、性に基づく役割の配分を天性の差とみなして、女性は男性を凌ぐようなことはするべきではなく、「家」を治め、「家」の秩序を安定させる存在として重視される。

瀬地山角、前掲書、145、214～216頁　参考

12　瀬地山角、前掲書、127頁

13　1905年をさかいに朝鮮半島で「賢母良妻」という言葉が女性教育に用いられ、1906年以降に「賢母良妻」という言葉が四字熟語の言葉としてメディアに頻繁に登場することになる。

金眞淑「日本の「良妻賢母」と韓国の「賢母良妻」にみる女子教育観」『日本近代国家の成立とジェンダー』柏書房、2003年、31、38頁

14　1898～1909年韓日合併前の「賢母良妻」像は、国民たる夫の内助者、次世代の国民の教育者、家庭管理などの役割が遂行できる「賢母良妻」的な女性であり、その養成を目的として女性教育の実施が行われた。つまり、学問活動と知的活動とはまったく無縁のままに生きてきた従来の女性のあり方では、近代国民国家を建設するための基盤は形成されにくいため、社会の原動力なる家庭を改革することは、まず家庭の主体者なる婦人のあり方から変えさせる必要性が出てきたと見て取れる。

金眞淑「日本の「良妻賢母」と韓国の「賢母良妻」にみる女子教育観」『日本近代国家

の成立とジェンダー』柏書房、2003年、30～31頁　参考

15　「朝鮮教育令」第5条は女子高等普通学校の教育目標として「婦徳の涵養」を取り上げているが、ここでの「婦徳」を女子修身教科書では、＜従順と温和と貞操＞として提議している。家事を中心とした家庭科教育が高等学校での教育科目の一つとなり、家庭内で男性の助手や協力者になれるように実用的な裁縫、手芸などが教育されたように、ごく少数の官・公立学校以外において、女性は知識教育から排除されたのである。
李南錦「植民地朝鮮の「新女性」と母性イデオロギー　――の小説「」と彼女の言説分析を通して――」『お茶の水女子大学ジェンダーセンター年報』第9号、お茶の水女子大学ジェンダー研究センター出版、2006年3月29日、41頁　参考

16　富国強兵をめざす明治政府は、国民生活の近代化を促進する必要から、率先して西洋の近代思想や生活様式を取り入れ、文明開化の風潮は明治初期の新しい世相となった。1871年学制の公布によって国民教育の基礎が形成されるなか、日清戦争、日露戦争の経験によるナショナリズムの高揚がきっかけとなり、国力増強と近代国家づくりに必要な次世代の育成の必要性が高まった。次世代教育のために女性教育が実施され、その内容とは次世代の育成が出来る賢い母、「家」という領域を切り盛りできる妻の役割が強調され、「良妻賢母」イデオロギーに基づく女子教育の政策が行われる。家庭内家事など儒教的な「良妻賢母」イデオロギーに代わり、「国家主義的」強い良妻賢母主義が登場してきた。
金貞淑「日本の「良妻賢母」と韓国の「賢母良妻」にみる女子教育観」『日本近代国家の成立とジェンダー』柏書房、2003年、20頁　参考
深谷昌志『良妻賢母主義の教育』黎明書店、1965年、pp.139～140　参考
千野陽一「良妻賢母」『世界大百科事典』第29巻、平凡社、1988年、687頁　参考

17　瀬地山角、前掲載、142頁

18　宋連玉「在日朝鮮人女性とは誰か」『継続する植民地主義－ジェンダー/民族/人種/階級』青弓社、2005年、262～263頁

19　宋連玉「「在日」女性の戦後史」『歴史のなかの「在日」』藤原書店、2005年、142頁

20　宋連玉、前掲書、142頁　再引用

21　宋連玉、前掲書、134～135頁　再引用

22　岩崎稔・大川正彦・中野敏男・李孝徳『継続する植民地主義　ジェンダー/民族/人種/階級』青弓社、2005年、262～263頁

23　日本に住む朝鮮人に対しては、朝鮮に住む朝鮮人に対する以上に、過酷な抑圧が加わっていた。国家権力による支配だけでなく、社会的差別の強制力によって日常がとりかこまれたからである。朝鮮人としての被差別と日本人への同化強制の点において、はるかに厳しい生き方を辿らされたのである。

小沢有作『在日朝鮮人教育論　歴史篇』亜紀書房、1973年、31頁

24　徐阿貴「在日朝鮮人女性にみる世代間の連帯とエスニシティ――東大阪におけるデイハウスの事例から」『国際移動と＜連鎖するジェンダー＞　再生産領域のグローバル化』作品社、2008年、187頁

25　小説版と映画版の両方から、金俊平が清子を「モノ」にしたことへの喜びから、朝鮮人部落の街で日本帝国主義からの勝利の「戦利品」である清子を見せびらかす場面がある。この場面から金俊平にとって清子の存在は、ただ「女」の「性」を「もの」にすることではなく、在日朝鮮人が「日本人女性」を「もの」ことに意味が付与されていることが、再確認できるのである。

26　梁石日、前掲書(下)、336頁

27　『識字と人権－国際識字年と日本の課題』国際識字年推進中央実行委員会編、解放出版社、1991年、134頁

28　北朝鮮「帰国」事業は、1959年12月14日から1984年7月25日まで行われ、日本の新潟港から北朝鮮の清津港まで187回に渡る帰国船で約93390名が北朝鮮に「帰国」した。